

三井のリフォーム 住生活研究所所長 西田 恭子

家財整理をしてみて

我が家は何回も増改築を繰り返してきた。半同居の二世帯住宅にし、二回ほどの内装替えや定期的にやっていたる設備の交換、外壁のやり替え、外構工事などなど。そして木造住宅の耐用

年数は延びたとはいえ、これ以上はもう難しいところまでできているように思う。となると次に待っているのは、住み替えか、建て替えか、はたまた大掛りなりリフォームか、どちらにしてもその前に待っているのは引越しいという難問だ。

めでたみだ。さまざまな外出先を考えると捨てられない洋服も、買ってから何年たったとか、それなりに高額品であるとか、基準点を上げると、全部不用品になり、残る洋服がなくなってしまう。そう。そういうわけにもいかないと、中庸を見つけたのは、これもなかなか難しい。

設計者として大がかりなリフォームを多くさせていた。当然のようにお客様には仮住まいをお願いしていたのだが、はたと我が事として考えると、これは大変だ。

さらに、困るのは、物を捨てるのが大変な時代というところ。役所から一辺が三〇センチを超えるものは粗大ごみですといわれると、もどつていいのかわからない。地域によっては五〇センチ以上のところがあると聞くと、羨ましくなる。そんなことを考えていると今は一切ものを買わないぞ！ と思ってしまうのだが、それは日本経済の活性化とは裏腹だ。

思い出につながるアルバムも、全部で一〇〇冊を超え、データー化も考えてみたが、おそらく紙ベースでなくなったものは二度と目の見えないだろうと思つて躊躇する。

住居内の物の整理の仕方については、日頃、リフォームセミナーで話したり、執筆したりしている。それにも関わらず、自分自身は、築五〇年を超える家に住んでいるので、天袋の奥に何が入っているのか分からない。五〇年前に建てた家は収納方法が押し入れ中心のため、収納形態が悪く、物が外にはみ出し、それを家

具で補おうとするので、家具の数だけでも大量にあるのだ。家具を除くと、家の収納率（床面積に対する収納部分の面積の比率）は極端に悪い。紺屋の白袴とほまさにこのことだ。

特に親からの代のものがある家は、絶対量が多く捨てがたいものもある。継承するものといつてもさしたるものはないのだが、お正月に面白がって弾いてみる三味線も、名人戦で使われるような分厚い囲碁盤も、そして花瓶や着物も、これを機に親戚に引き取ってもらうことにした。そう決心するのにも、かなりの時間がかかった。

そんな愚痴ともつかない独り言をいながら、今までそれをこなしてきたリフォームの先陣に敬意を称しながら、家の整理を始

めてみた。さまざまな外出先を考えると捨てられない洋服も、買ってから何年たったとか、それなりに高額品であるとか、基準点を上げると、全部不用品になり、残る洋服がなくなってしまう。そう。そういうわけにもいかないと、中庸を見つけたのは、これもなかなか難しい。

数か月かかった我が家の整理整頓を振り返って、家財の整理は簡単ではないことを改めて実感した。

西田恭子氏プロフィール＝一級建築士。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム 住生活研究所」所長。リフォーム設計の経験を活かし、新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常

講師。インテリア学会会員。日本建築家協会正会員。

西田恭子氏プロフィール＝一級建築士。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム 住生活研究所」所長。リフォーム設計の経験を活かし、新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常



西田恭子氏プロフィール＝一級建築士。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム 住生活研究所」所長。リフォーム設計の経験を活かし、新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常講師。インテリア学会会員。日本建築家協会正会員。